能代カップ高校選抜バスケットボール大会

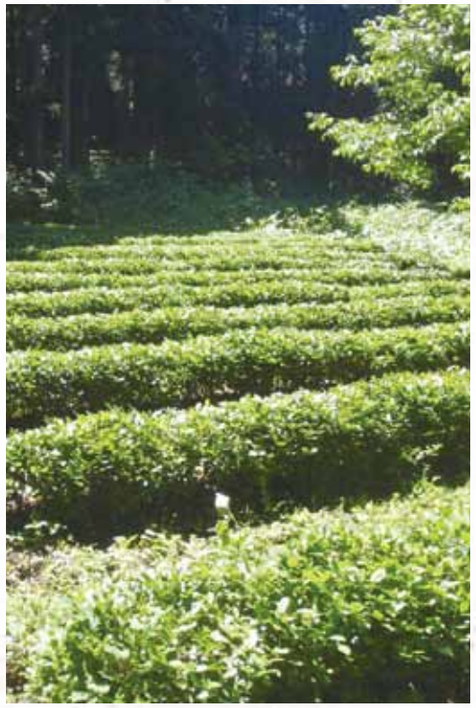
能代凧揚げ大会

岩関（いわせき）神社祭典

同じ頃（例年5月3日）、地域内を神輿が練り歩く「岩関神社祭典」も行われます。

これは元和年間に二ツ井地域で岩堰用水路開さく工事を指導した秋田藩家老・梅津政景の偉業を称えたお祭りです。寒村であった二ツ井地域はこの用水路のお陰で新田ができ戸数も飛躍的に増えました。

岩関神社祭典



檜山茶畑

日吉神社中の申祭　嫁見まつり

日吉神社中の申祭　嫁見まつり

5月の2番目の申の日前日（旧暦4月）に行われる「日吉神社の嫁見まつり」は一説には日吉神社の祭神を縁結びの神としてあがめ、幸せをお祈りしたことから始まったと言われています。

昭和初期頃は新妻や女の子たちが美しく着飾って神社に集まりましたが、昭和40年代頃からは1年以内に結婚した初嫁が花嫁衣装を着て良縁感謝と末永い幸福を祈願するため参列するようになったと言われています。

檜山（ひやま）茶摘み

6月になると、能代市檜山では一番茶が摘まれます。茶はツバキ科の常緑樹で、檜山で栽培される茶は北限の茶として知られています。

今から280年前の1730年頃、多賀谷家の家老が宇治の茶畑を視察して種根を持ち帰ったのが始まりで、栽培面積は狭いのですが、6月初めに出る一番茶は上方産の玉露に匹敵するといわれ、茶人の間で珍重されています。

八十八夜の頃、古葉を剪定し、8月下旬まで6回から9回も「手摘み」の製法で宇治系の技術を伝えています。

夏――港・七夕・墓参り

能代の夏は「花火」で幕を開けます。
能代の花火は１９５８年に第二次能代大火復興記念行事として始まりましたが、諸般の事情により１９７９年には中止。２００３年に「港まつり能代花火大会」として復活しました。

港まつり能代花火大会

港まつり能代花火大会

７月下旬、能代港下浜ふ頭周辺で開催されます。
秋田県内の４つの花火業者による「競演幻想花火」を含む１万５千発打上の壮大な規模を誇ります。
７月に入ると、町のあちこちから笛の音が聞こえてきます。「能代ねぶながし」通称「役七夕」の稽古が始まるからです。

役七夕

役七夕は８月６日、７日の両日開催されます。
６日は山車を引き回し、７日の晩には灯籠のシャチを川に流します。
「役」というのは祭りの当事者がそれぞれの役付きになり上下関係も厳格に守られていたことから命名されたものです。
そしてこの「ねぶながし」が終わると、お盆（墓参り）です。
お盆も正月同様、各家々ではご馳走を準備します。15日（今は13日）には餅つきをして墓に供え、家で食べたものですが、現在では餅をやめ「シンコ」に代える家も少なくないようです。
赤飯や季節の野菜の煮染なども準備、お墓に供えました。今はあまり見かけませんがテン（ところてん）は、どこの家でも作るお盆料理でした。

能代七夕「天空の不夜城」

天空の不夜城

能代では江戸の後期から明治にかけて城郭灯籠が運行されていたと言われています。当時の設計図はなく、文献や写真を基に現代に復活させました。
一世紀の時を越えて復活した「天空の不夜城」は２０１３年夏に一基目が完成。高さ５丈８尺（約17．６ｍ）の大型城郭灯籠です。２０１４年夏には二基目、日本一の高さとなる24．１ｍの大型城郭灯籠が完成しました。
二基の迫力ある大型七夕が太鼓やお囃子と共に市内を練り歩きます。空にも届くような巨大な灯籠は圧巻で、賑やかなお囃子も見る人を惹きつけます。

能代宇宙イベント

能代宇宙イベント

毛色の変わった夏の行事では、「能代宇宙イベント」があります。毎年８月中旬、日本最大規模の学生や社会人によるロケット打上げおよび自律ロボット制御のアマチュア大会です。１９６２年、ＪＡＸＡ（宇宙航空研究開発機構）の付属研究施設であるロケット実験場が能代市に開設されたのが、その由来です。
県内外の大学生たちが多数参加します。

秋――みのりの秋は短くも華やかに

おなごりフェスティバルin能代

9月の第2土曜日には能代でも最大級のイベントである「おなごりフェスティバルin能代」が開催されます。「おなごり」というのは「行く夏を惜しむ」というのが名前の由来。

「青森ねぶた」、「盛岡さんさ」、「浅草カーニバル」、「能代七夕」などが常連で、東北のお祭りが一同に介し、市内をパレードする。約12団体、総勢2，500人が出演するイベントには一日で20万人以上もの見物客が押し寄せます。

「おなごりフェスティバル」が終わると能代は本格的な秋に突入します。

おなごりフェスティバル in 能代

きみまち阪紅葉まつり

きみまち阪紅葉まつり

10月中旬～11月上旬、「きみまち阪紅葉まつり」は巨大な奇岩が連なり、その絶壁にしがみつく松と紅葉の緑と紅の調和が美しく絶景のロケーションの中で開催されます。特に一本松から対岸の七座山と雄大な米代川を望む眺めは言葉を失うほどの美しさです。

きみまち阪はかつては郭公坂、馬上坂、畜生坂などと呼ばれ、羽州街道の最大の難所でした。明治14年、ここを訪れた明治天皇がその美しさに感動し「渓后阪（きみまちざか）」という名称をつけたことでもしられています。

紅葉以外にも桜やツツジの名所でもあります。

桜の頃のきみまち阪

能代の名所と特産

冬――「なごめはぎ」と「賽ノ神」

能代の冬は厳しい。日本海からの冷たい風は雪を巻き上げ、白神山地から吹く風の冷たさも寒さに拍車をかける。おちおち長い冬の眠りに入ることもむずかしいほどです。

なごめはぎ

なごめはぎ

冬の行事で特筆すべきなのは「なごめはぎ」。あの有名な男鹿のナマハゲと同じ起源をもつ行事で、冬の間囲炉裏の火にばかりあたって股や脛につく火斑を「なごめ」と言い、これをはぎ取ることに由来します。

大みそか、能代の南では「なごめはぎ」があります。浅内・中浅内・寒川・黒岡の4集落に伝わる行事で、浅内と中浅内では番楽の面をかぶり、わらで作ったケラをつけ、包丁とか斧・鉞の造り物を持ち、拍子木や鈴などを持ちながら、音を出して練り歩きます。「えぐねーわらし、えねがー」と叫びながら家中を回り、子供を探し、家の亭主の丁寧なもてなしを受けます。

塞ノ神

能代の北部でも同じ時期、素朴な神祭りの形式が残されています。各家の玄関先で「塞ノ神」を家の内に向け、子供たちが囃し歌を歌います。

「塞ノ神」は男女一対のご神体（人形）で、それを飾り付けたお堂に乗せます。お堂を背負うのは小学校6年生前後の男の子たちで、集落一軒一軒ごとに訪ね歩きます。

こうして1年の大きな区切りであるお正月を迎えるのです。

日本最大級の黒松林
風の松原

能代市の海岸沿いに連なる「風の松原」は日本最大の規模を誇る松林です。東西幅1キロメートル、南北総延長14キロメートル。面積は約760ヘクタールで、東京ドーム163個分もの大きさです。

厳しい海風による飛砂を防ぐために江戸時代から植栽されてきたもので、いまや700万本もの見事な松林になりました。ウッドチップを敷き詰めた「健康づくりのみち」や、サイクリングコースなどがあり、身も心もリフレッシュできる緑の空間が広がっています。

サン・ウッド能代
（風の松原案内所）

風の松原の歴史や松食い虫に関して学べ、休憩もできる施設。松原の地図、野鳥のパンフレット、観光案内などがあります。

【施設のご案内】

■お問い合わせ
0185-52-3121

■開館時間
午前9時～午後10時
（体育施設の利用は午後9時まで）

■休館日
毎週月曜日
（月曜日が祝日、振替休日の場合は翌日）
及び年末年始と祝祭日の翌日

県立自然公園
きみまち阪

羽州街道最大の難所のひとつだった当地を訪れた明治天皇が、景色のあまりの美しさに感動し、この地を「偉后阪（きみまちざか）」と命名した。

昭和39年（1964年）に県立自然公園に指定されました。1500本ものソメイヨシノが咲き誇る桜の名所で、屏風岩をバックに咲く桜には格別の美しさがあります。

園内にある「恋文ポスト」に投函すると、ハート型の風景印が押印されて届く。
（利用期間４月１日～11月末）

国登録有形文化財
旧料亭 金勇（かねゆう）

料亭金勇は、初代金谷勇助氏が明治23年に創業し、木都能代を象徴する建物で、県内屈指の料亭として各種宴会や接待、婚礼などに広く使われました。

現在の建物は、昭和12年、２代目金谷勇助氏によって建てられたもので平成10年10月26日に国登録有形文化財に登録されました。天然秋田杉の良さを十分に活かし、同様の再建築は不可能な貴重な建物です。

■お問い合わせ　0185-55-3355
■休館日　年末年始

能代の酒蔵

喜久水（きくすい）
喜久水酒造合資会社

喜久水酒造の当主は代々喜三郎を襲名し、当代は六代目。

創業は明治８年。幾度かの大火に見舞われ創業時が定かでなくもっと古い弘化年間（1844～48年）ではないかという説もあります。

酒造りは「一麹、二酛、三造り」を基本に伝統的な三段仕込みを丁寧に守り、醪が造られます。瓶詰された酒は、明治時代に建造され今は国の登録有形文化財となった鉄道単線用トンネルを地下貯蔵庫として利用し、通年12℃で熟成。この「地下貯蔵庫」は明治33年に竣工した煉瓦造りで全長100mの旧「鶴形トンネル」で最高６万本の貯蔵が可能です。

樂泉（らくいずみ）
合名会社西村醸造店

西村醸造店の前身はかつての近江商人が全国各地に起こした酒蔵江州店のうちのひとつです。

もともと太物や糸などを扱う繊維問屋であった初代西村荘右ェ門が良い水と米に恵まれながら地酒が無かった時代に、酒造業を始めたのが宝暦年間（1751年～1763年）でした。

酒造りは、蔵の近隣を雄大に流れる米代川の伏流水から豊かに湧く清冽な硬水を仕込み水として、良質な米の醗酵を助けて淡麗でさっぱりとした口当たりの酒を醸します。

杜氏蔵人の「品質第一」を目標に伝統の手造りを守り、地元の酒としてのこだわりをもって醸しています。

能代の伝統食

檜山納豆

檜山納豆の発祥には諸説あります。佐竹氏転封の時に水戸の浪人久島氏がもたらしたとの説や、天明の飢饉直後に加藤新太郎によって始められたとの説が伝えられています。

戦前に檜山を襲った大火で納豆製造は一度絶えましたが、昭和末期に市の援助を受けて復活。わら包みで納豆菌を自然に発酵させる伝統的な製法は、味も香りも大量生産された納豆とは違う風味を持っています。「糸引き納豆」とも言われ、粘りが強いのが特徴です。

能代うどん

麺が細く、ツルツルとした食感が特徴の能代うどんは、多くの市民に親しまれています。乾麺として商品化され、幕末にはすでに一般的になり、人を招いた際の夜食や、贈答品として使われていました。

大正6年『最近之能代』には能代の重要輸出品として木材・酒・味噌・醤油と並んで「饂飩」があげられており、当時から特産品であったことを伝えています。

現在も明治期創業のうどん店が複数存在し、その味を伝えています。